

学生キャンペーンおよび学生の 取り組みの紹介について

平成21年10月27日

全国学生献血推進実行委員会

実行委員長 太田 裕己

(目次)

1. 全国学生献血推進実行委員会について
2. 全国学生クリスマス献血キャンペーンについて
3. 各都道府県の効果的な取り組み
4. 東京都の取り組み

1. 全国学生献血推進実行委員会について

- 全国の7ブロック、計16名の学生献血推進メンバーによって構成された学生献血推進団体の全国代表組織。
- 年に3回、学生間の意見交換と若年層に対する献血推進の普及を目的に会議を行い、全国統一のクリスマスキャンペーンに向けての話し合いや反省を行っている。
- 年に1度、実行委員会主催のもと47都道府県の学生献血推進団体代表者が集まって交流を深める「代表者会議」が行われる。

2. 全国学生クリスマス献血キャンペーンについて

(東京都の例を中心として)

- 冬場の血液不足の解消と、若年層への献血の理解と協力を促すことを目的として、12月に全国統一で行われるキャンペーン。
- 企画・運営を始めとして、献血の呼び掛け、装飾、受付、誘導、準備や片づけに関して全て学生が主体となっていく。
- 学生はサンタの衣装やけんけつちゃんの着ぐるみを着て呼びかけを行い、テント等もクリスマス一色に飾り付ける。
- 東京都では最近70～80名の学生ボランティアの参加があり、その数は増加傾向にある。
- 一人でも多くの方にご協力いただくために、各県趣向を凝らした取り組みやイベントを行っている。
〔例：ペア献血、ハンドベル演奏、吹奏楽演奏、ガラポン抽選会、アートバルーン・風船の配布、野球選手との記念撮影会〕
- 昨年度のキャンペーンでは全国で、受付13770名、献血10834名の方にご協力いただいた。

(東京都のクリスマスキャンペーンの様子)



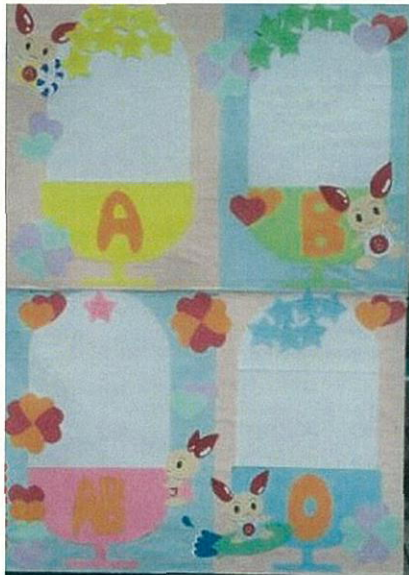
3. 各都道府県の効果的な取り組み

- ◆ 献血ウィーク（北海道ブロック）
→学生ボランティアに実際に献血をしてもらう週間を作り、献血の内容を知ってもらう。
- ◆ 成分献血キャンペーン（近畿ブロック）
→安定した血液を確保するために、一定の期間中毎月30本を目標に学生ボランティアが成分献血を行う。
- ◆ ティッシュの事前配布（東北ブロック）
→献血知識PRのためにティッシュにPRチラシを挟んで、キャンペーンの事前に配布。
- ◆ メッセージを小児病棟へ寄贈（近畿ブロック）
→メッセージボードをキャンペーン時に設置し、献血者の励ましの言葉を後日病院の小児病棟へ寄贈。
- ◆ 博多どんたく祭りへの参加（福岡ブロック）
→博多どんたく祭りにおいて、各県が呼び込み時に使っている衣装を着ながら献血の宣伝をして練り歩く。
- ◆ 高校生への講義（福岡ブロック）
→高校生を対象にして献血の詳しい知識や献血の重要性について講義を行う。
- ◆ 1225献血キャンペーン（福岡ブロック）
→ブロック全体で1225名の献血者を目指すキャンペーンを実施し、各県一丸となって目標を目指すことで大幅な献血者増加につながる。
- ◆ ラジオ出演、テレビ宣伝（諸ブロック）
→学生がラジオに出演し、献血キャンペーンの宣伝と献血へのご協力を呼び掛ける。また、ニュースリリースをメディアに送付し、キャンペーンの様子をテレビに取り上げってもらう。

4. 東京都の取り組み

- 毎月の会議にて学生に向けた勉強会やDVD上映、血液センターの見学会を実施。
- 呼び込みマニュアルを作成し、呼び込み時に心がけることや、献血の知識を呼びかけることをボランティアに意識させる。
- 献血者のメッセージを貼り付けるカウントアップボードを設置。
- 献血の現状について書いた説明ボードを設置。
- 今年度から「患者さんのメッセージ」を献血者にお配りする予定。

カウンタアップボード



説明ボード



患者さんのメッセージ例



■ 現在白血病の治療を受けている30代の父親です

献血に協力していただいているすべての方々へ

自分は白血病の治療を受けている30代の父親です。
 今まで自分が健康だった頃、献血に対して興味はあったものの勇気が無く、実際に足を運ぶことはありませんでした。
 けれど、自分では想像もしていなかった病気になり、治療を受けるようになって献血の大切さを改めて実感し、みなさんの勇気に感謝と感激をしています。

もし、輸血する血液が無く、自分にもしものことがあった場合、残された子供たちはどうなるのでしょうか……。

退院して元気になったら、今度は自分が困った人たちのために何か協力したいと思っています。

献血にご協力いただき本当にありがとうございます！！

AKさん

2/37



■ 生かされた命大切に

皆さまにお礼を言いたくて筆をとりました。

息子が急性リンパ性白血病と診断されて四年、その闘病生活は壮絶なものでした。体内には抗ガン剤が注入され、その副作用で体は衰弱。一月経過後、敗血症により高熱、悪寒戦慄、呼吸困難、目も見えにくくなり集中治療室へ。血球が減少し赤血球輸血や血小板輸血を続けなければならぬ状態でした。

その間、数えきれないほどの血液製剤のお世話になりました。苦しみわが子を見るにつれ、輸血を受けるなら副作用の少ない400mL製剤がどんなにありがたかったことか。

90%は駄目だといわれていた命、献血に協力してくださった方や医療スタッフのお陰ですっかり息子は元気になり、今では高校生。ラグビー部で活躍しています。生かされた命を大切にします……。

主婦

4/37